

令和6年度 下野市中学生平和研修派遣事業 報告書



広島県 広島市

令和6年8月5日(月)～8月7日(水)



下野市

市長あいさつ



下野市長 坂村 哲也

下野市は、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を願い、平成18年6月16日に「非核平和都市宣言」を行い、平和行政の推進に取り組むとともに、広島市長が提唱した「核兵器廃絶に向けての都市連帯推進計画」の趣旨に賛同し、平成20年2月より、国際平和都市である広島市が事務局を務める平和首長会議に加盟しております。

毎年、7月から8月にかけては、市庁舎1階市民ロビーにおいて「原爆と人間パネル展」を開催しており、さまざまな写真や絵から、原爆が投下された後の人々やまちの凄まじい様子がありありと伝わってきます。

次代を担う方々に、戦争の残酷さと教訓を引き継ぎ、今ある当たり前の日常の大切さ、そして、平和の尊さや生命の尊厳について伝えていくことが我々の大きな役割であり、下野市と壬生町が合同で実施している中学生平和研修派遣事業については、非核平和都市宣言の推進及び平和学習活動の一環として平成27年度より取り組んでおります。

中学校2年生及び義務教育学校8年生の国語の教科書に「壁に残された伝言」という教材があります。派遣団の生徒の皆さまには、この教材の場所である袋町小学校平和資料館の見学や、8月6日に行われた平和記念式典への出席をはじめとし、被爆体験伝承講話の受講、広島平和記念資料館、広島二中原爆慰霊碑及び原爆ドームの見学、元安川への灯ろう流し、原爆の子の像への千羽鶴奉納等の学習を通して、広島で過去に起こった恐ろしい出来事をそれぞれ自身の目と耳で見聞きし、それらの歴史を経た現在の広島についても学んでいただきました。

教科書や本でしか見ることのできなかつた建造物や、展示物を目の当たりにし、その学びから心で感じたことを、各学校の文化祭等で発表し、平和な社会を継続させていくための第一歩を踏み出してくれることを期待しております。

そして、その一歩が輪となって広がり、たくさんの人々が、原爆の恐ろしさや戦争の悲惨さについて再考し、平和の尊さについて考えるきっかけとなることが、この事業の大きな趣旨の一つだと考えております。

結びに、本事業にご参加いただきました生徒やその保護者の皆さま、また、事業実施に向けてご協力いただいた、団長をはじめとする学校関係者等多くの方々に心から御礼申し上げます。

「下野市・壬生町中学生平和研修派遣事業に参加して」

下野市・壬生町中学生平和研修派遣団団長 海老原 忠

原爆投下から79年となる今年、8月5日から7日まで、被爆地である広島への平和研修に団長として生徒を引率して参りました。派遣団は、下野市の中学2年生と義務教育学校8年生8名、壬生町の中学2年生4名、引率者5名、添乗員1名の計18名です。快晴の3日間で猛暑の中での研修となりましたが、充実した研修とすることができました。

8月5日の朝、下野市庁舎での出発式後、多くの皆さんに見送られ出発しました。

広島市に到着後、最初の研修は「被爆体験伝承講話」でした。最も生徒の心に残った研修の一つです。御講話くださった水野さんは、被爆二世とおっしゃっていました。御両親から伺った話や御自身の体験などを基に、原爆投下直後の様子やその後の生活などについて話をしてくださいました。話には凄惨な写真や衝撃的な内容もありましたが、生徒たちは真剣に耳を傾けメモをとっていました。水野さんの御両親はお二人とも被爆しておりすでに亡くなっているそうですが、火葬された御遺体は、骨など全くなく灰しか残っていなかったそうです。また、被爆者の子、孫という事実は、結婚等にも影響を及ぼしているそうです。被爆は後遺症や悲しい記憶だけでなく、今なお様々なところで辛い影響を残していることを改めて知りました。さらにアメリカは広島を原爆投下の候補都市としていたため、空襲を禁止していたという事実も生徒を驚かせていました。

続いて、「原爆ドーム」を見学しました。あまりにも有名な建物ですが、この残された建物から、原爆の破壊力のすごさと恐ろしさを生徒たちは改めて感じる事ができたと思います。

その後訪れたのは、「広島平和記念資料館」です。ここには、原爆による被害の大きさや当時の様子を物語る実物や写真、絵がたくさん展示されており、その一つ一つが原爆投下後の惨状を物語っていました。本当にこれが一発の爆弾によりもたらされた現状なのかと疑いたくなる展示物の数々でした。生徒は説明を読んだり音声ガイダンスを聞いたりしながら、それぞれに様々な思いを持って見学していたことと思います。またこの日は平和祈念式前日ということもあり、原爆投下による惨劇の状況を知るために、国内外から多くの見学者が来館しており、館内は身動きがとれないほどでした。

初日最後は、平和記念公園のすぐ近くにある旧広島第二中学校の慰霊碑を見に行きました。爆心地から600mほどのところで作業をしていた生徒や

職員のほぼ全員が、即死の状況だったそうで、この慰霊碑には原爆や戦争で亡くなった352名の名前が刻まれています。

2日目、8月6日早朝、ホテルを出発し原爆死没者慰霊式・平和祈念式の会場へ向かいました。生徒たちは少し緊張した面持ちで会場入りしました。この式は「記念式」ではなく「祈念式」という文字を使っています。主催者の思いを感じることができます。会場は100カ国以上の国々の代表と、この派遣団の生徒を含めた多くの人で埋め尽くされ、この式の重みを実感しました。原爆死没者名簿奉納や献花、黙とう、そして広島市長による平和宣言、こども代表による平和への誓い、総理大臣等の挨拶と続きました。原爆死没者名簿には、今年も新たに5,000名以上の方々の名前が加わり、総数は34万4,306名にもなったそうです。原爆の被害は終わっていないことを感じます。広島市長の平和宣言には、「私たちは、いまこそ、過去の憎しみを乗り越え、人種、国境の別なく連帯し、不信を信頼へ、憎悪を和解へ、分裂を融和へと、歴史の潮流を転換させなければなりません。」という当時14歳で被爆した男性の平和への願いを紹介すると共に、「次代を担う若い世代の皆さんには、広島を訪れ、この地で感じたことを心に留め、幅広い年代の人たちと『友好の輪』を創り、今自分たちにできることは何かを考え、共に行動し、『希望の輪』を広げていただきたい。」との言葉がありました。さらに、こども代表による平和への誓いでは、「願うだけでは、平和はおとずれません。色鮮やかな日常を守り、平和をつくっていくのは私たちです。」という思いが語られました。その言葉の一つ一つに平和への願いと、二度と繰り返してはならないという強い思いが感じられました。きっと、生徒たちの心に強く深く届いたことと思います。

その夜には、多くの被爆者が水を求めてたどり着き、力尽きた元安川にて、それぞれに平和への願いを書いた灯籠を流しました。その美しさは見とれてしまうほどでしたが、亡くなった多くの方々の慰霊になればと思いながら灯籠を流しました。水面に浮かぶ灯籠は数知れず、この日元安川を訪れた平和を願う人々の多さを感じました。

3日目、8月7日最終日。まず平和記念公園にある「原爆の子の像」に行き、原爆で亡くなった「佐々木禎子」さんを始めとする多くの子供たちの霊を慰め、平和への祈りが届くようにと、各校の生徒が折った千羽鶴を団員の生徒が奉納しました。

その後、公園内にある「アオギリ」の木を見に行きました。被爆して全ての枝葉はなくなり、爆心側の幹半分が焼けてえぐられてしまったにもかかわらず、翌年の春になって芽吹き、人々に勇気を与えた木です。今も傷跡はそのままですが、青々とした葉をたくさん付け、こぼれた実から育った新たなアオギリの木も成長していました。

最後の研修先は、「袋町小学校平和資料館」です。袋町小学校は、爆心地

から460mにあり被爆しました。木造校舎は吹き飛び全て燃えてしまいましたが、鉄筋コンクリートだった西校舎の外郭のみが残り、翌日から臨時の避難所や救護所となったそうです。そこを訪れた方々が焼け焦げた壁にチョークで書いた伝言が、平成11年に壁の下から発見され、校舎の一部が資料館として保存されています。そこには、混乱の中で大切な人の消息を尋ねたり知らせたりする伝言が刻まれていました。生徒は、ビデオでの解説や多くの資料を、真剣に見たり読んだりしながら、当時の様子を思い浮かべていたことと思います。本市採用の中学2年生の国語の教科書には、「壁に残された伝言」という、まさにこの袋町小学校の伝言を教材とした文章が掲載されており、特別な思いを持って見学していたことでしょう。

最終日に偶然、被爆した路面電車を見ることができました。再塗装はされていますが本体は当時の物だそうです。その路面電車が走るまわりには多くのビルが建ち並び、車が行き交っています。現在は路面電車も流線型の新しい車両が主流となってきています。道路は路面電車のレールが中央に2車線、その両側には車用にそれぞれ2車線が走る大きな通りがあちこちにあります。その街並みからは原爆により被災した様子はいかがえません。だからこそ、原爆投下による惨劇を忘れてはならず、それを伝えていくと共に平和の尊さを訴えていかなければならないと改めて思いました。

この3日間の研修は生徒一人一人にとって、それぞれにたくさんのことを学び感じた貴重な時間になったことと思います。生徒たちには団員として、平和の尊さや命の重み、広島の地に立ったからこそ学べたことや感じた思いを多くの人に伝えていってほしいと思います。

最後に、今回このような研修の機会を生徒たちに与えてくださった坂村市長様、ご尽力くださった市当局の皆様、保護者の皆様、学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。



アオギリの木



とうろう流し

「伝え、繋ぐ平和と命の尊さ」

南河内小中学校 8年 岩上 美海

79年前に、原爆を投下された地「広島」に私は中学生平和研修派遣団として訪れました。広島に着くと、本当に原子爆弾が投下されたのかと疑ってしまう程に整備され、発展を遂げている光景に、復興力の高さを感じました。さらには、立ち並ぶ高層ビルや交通量の多さから、広島復興に携わった多くの人々の努力を感じることができました。

初日に訪れた平和資料館では、展示されている写真や絵から、どれも目を背けたくなる程の恐ろしさを感じ、原爆の怖さを改めて思い知りました。実際に起こったことだと頭の中では理解していても、焼け野原になってしまった様子や、肌が赤くただれ、腫れ上がっている人々の姿を見ると、「これは本当に起きたことなのだろうか」と疑いました。しかし、当時の写真や絵だけでなく、実際に使用していた服や三輪車、家族に宛てたはがきなど、当時そこに生きていた人々の証がしっかりと残されており、現実には起こったことなのだと改めて感じました。一目で分かる原爆の残酷さに胸が痛み、もう二度と繰り返してはならないということを再確認しました。

2日目に参加した平和記念式典では、海外の方を含め多くの人々が参列しており、世界的にこの式典が重要視されていることが分かりました。厳粛な雰囲気の中で挙行された式典では、さまざまな方の平和についての話を聞く中で、参列している一人一人が平和について深く考えることができました。

原爆ドーム前の元安川では、灯籠流しを体験することができました。灯籠一つ一つに平和への願いが込められていました。色鮮やかな灯籠が流れている元安川は、とても幻想的で美しく、平和への願いの尊さを感じました。私は灯籠に大きく「平和」の文字を二面に渡って書き、戦争がこの世からなくなり、安心して誰もが平和に過ごすことができますようにと願いを込めました。さらに平和への願いを込めて折り鶴も描きました。私が灯籠に書き込んでいる時間は、ただただ平和を願い、灯籠を川へ流す時間は、平和資料館で学んだ命の尊さや、式典で感じた多くの人々の願いなどを思い出していました。灯籠流しを通して、今の平和のありがたさ、そして、その平和が当たり前ではないということを深く心に刻み、原爆の記憶が風化されないように伝え続けると決意しました。

私はこの3日間を通して、映像や資料だけでは知ることのできなかつた原爆・戦争の恐ろしさや、当時の人々の思いや願いなど、さまざまなことを学ぶことができました。実際に現地を訪れることで自分の目や耳、肌で感じることができ、とてもよい経験になったと思います。今回学んできたことをいかすために、戦争の恐ろしさや平和のありがたさを、身近な人だけでなく、多くの人に伝え、そして未来へとつないでいきたいと思います。

「ヒロシマの現在」

南河内小中学校 8年 鈴木 廉士

初めてやってきた広島のは、本当にこの場所が世界で初めて原子爆弾が投下された街なのかと疑うほど、発展を遂げたきれいな景色が広がっていました。高くそびえるビル群。道を埋め尽くす車や人々。現在の活気に満ちた広島。本当にかつて原子爆弾によって、数多くの尊い命が失われた地なのか、信じがたい気持ちで一杯になったことを覚えています。

研修初日に原爆ドーム付近で行われた、被爆体験伝承講話会においてお話を伺いました。伝承者からは、あの日のヒロシマについて、自分が思っていた以上の悲惨な話を聞きました。印象深かったことは、被爆者に対しての世間の対応が、あまりにも冷酷であったということです。学校では赤くたれた肌を理由に周囲から虐げられたり、会社では被爆者だからといって不当な扱いを受けていたりしたことを知りました。

それから、「被爆二世」などと、家族や子、孫まで、差別的な扱いを受けたという悲しい事実を知り、原爆が広島の人々に与えた影響は計り知れず、生き残った人たちが、延々と目を背けたくなるような言動や差別的な弊害を受けてきたことは、私にとって衝撃的な事実でした。

研修2日目は、平和式典に参加し、その厳粛な雰囲気の中で、たくさんの参列者の悲しい過去を知り、様々な気持ちがあふれました。黙祷をしていた時は、まるで時間が止まったように、平和記念公園はより荘厳な時間が流れていました。

平和研修に参加する中で、実際に被爆者の方の話を聞き、教科書では学ぶことができない、生々しい資料館の写真や遺品を自分の目で見て、当時の状況を知り、考える機会を得ることができました。辛くも生き残った人々は、目の前で大切な両親、兄弟を失うという想像を絶する経験をしたという事実。絶望的な悲しみの中、やっとの思いで手にした食べ物が、既に核爆弾によって汚染されており、さらにばたばたと人が倒れ、苦しむ様子。想像するだけで胸が張り裂けそうになり、苦しくなります。あの日のヒロシマを生きた方は、やりたいこともできず、我慢の連続で、ただ生きることで精一杯だったはずです。

現在は、平和で飽食の時代と言われています、好きなものを食べ、好きなことをすることができます。これは、当たり前のようにとても幸せなことなのです。しかし、戦争が起これば、一瞬にして、人々から笑顔を奪います。悲しい思いは二度と繰り返してはなりません。今回私が経験させていただいた「戦争のない平和のありがたさ」を周囲に伝え、さらにはたくさんの人たちと一緒にこのことを考えていけたらと思います。

今を生きる私たちが、戦争のない平和な世の中を生き続けていけるよう、平和の大切さを「命のバトン」として、次の世代にまですつないでいきたいと思います。

「世界平和を願って…」

南河内第二中学校 2年 小池 杏奈

広島に原爆が投下されて 79 年。私はともに学ぶ仲間と初めて広島を訪れました。そして、私はこの 3 日間を通して、様々なことを学び現地でしか感じることはできない貴重な経験をすることができました。それらはすべてが想像以上のもので、戦争の悲惨さと平和の尊さを身をもって感じる事ができたと思います。

当日の朝、出発式が始まり「戦争について、そして平和についてどのようなことが学べるだろう」という期待と不安を感じながら私は広島へと向かいました。1 日目の被爆体験伝承講話では原爆の威力のすさまじさが強く伝わってきました。それから、被害の大きさや当時の生活の苦しさまでもがよくわかりました。私はたったの 1 発で街を破壊した原爆のことを知る大切さを感じるとともに、被爆者の方々の体験をあまく見てはいけないのだと思いました。次に訪れた平和記念資料館では、当時の写真や被爆された方々の展示品は目を疑うような光景ばかりで言葉が出ませんでした。そして私は思いました。「これが戦争なのか」と。2 日目には平和記念式典に参列しました。そこでは厳かな雰囲気の中、平和への祈りに包みこまれました。式典で最も印象に残っていることは平和への誓いです。その言葉一つ一つに重みを感じ、心に深く刻み込まれました。特に、「願うだけでは、平和は訪れません」という言葉に私の心は動かされました。私はそこで改めて、平和の尊さを感じました。その夜の灯籠流しでは、多くの人が祈りを込めて灯籠を流していました。私も平和を願い、灯籠を流すことができました。そんな中、あの日はこの川で大勢の人が亡くなられたのだと考えると、胸が締め付けられるような思いでした。しかし、川に浮かぶたくさんの方々の灯籠のあかりを見ていると、温かい気持ちになりました。そして、最終日。原爆の子の像に千羽鶴を奉納したあと袋町小学校平和資料館を見学しました。そこには、あの日の伝言やとびらなどが展示されていました。それらからは、あの日を物語ると同時に人々の様子も思い浮かんできました。そして、教科書以上の迫力に圧倒されました。

今回の平和研修派遣事業では、戦争の事実とその悲惨さを学び、平和の尊さといのちの重みを学びました。さらに、平和の大切さと平和な世界をつくることの難しさも考えさせられました。そして、あの日、日常が奪われた広島の人々の力強い復興と努力も実感することができました。それらをもとに、広島の実事と平和について多くの人へ積極的に伝えていきたいです。また、広い地球に世界でただ一つの被爆国として、広島、長崎、その次が脅かされる今に争いを終結させるための糸口を探していけたらと考えます。今、笑顔にあふれる日々を過ごしていることに感謝して、平和をすべての人へと繋いでいきたいです。世界が平和に包まれることを願って…。

最後にこの平和研修派遣事業に関わってくださった皆様、温かく応援してくださった先生方や家族にこのような貴重な経験を与えていただき、心から感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

「ヒロシマから学んだこと」

南河内第二中学校 2年 山内 大輔

ヒロシマには、たくさんの衝撃的な事実がありました。

私は広島で様々なことを感じました。その中でも、広島のマイナスと、広島のプラスを感じたことについて書きたいと思います。まず、マイナスです。特にこれは、広島平和記念資料館で感じました。広島をおそった悲しい出来事がたくさんつまっている資料館には、目もそむけたくなるような恐ろしい事実が語られていました。様々な資料が、決して同じことを繰り返してはいけない、ということを私たちに伝えていました。そして、プラスです。これは、千羽鶴を奉納したときに感じました。そこには、全国から寄せられたたくさんの千羽鶴が奉納されていました。世界に平和を築くための多くの人の思いが表れている気がしました。

私が一番印象に残っている体験は、被爆体験伝承講話会です。私はこの講話の中で特に二つ、衝撃的だったお話があります。一つは、当時、中学生も手伝っていた「建物疎開」という作業です。建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐために建物を壊して空間を作ることだそうです。人が築き上げてきた建物を壊すということ、中学生が自分の未来のために勉強するはずの時間にその作業を手伝っていたということが、忘れられません。もう一つは、広島が原爆投下の候補地だったために、空襲禁止にされていたということです。原爆をおとすために、あらかじめ予定されていた場所だということが、言葉ではうまく説明できませんが私はとてもショックでした。とてもむごい、悲しい出来事だということを改めて実感しました。

私はこの派遣を通して、たくさんの学びを得ました。多くの衝撃があり、たくさんのがんが脳裏に焼き付いています。私は被爆体験伝承講話を聞いているとき、恐怖すら覚えました。私たちはご両親が被爆体験をされた方にお話を聞きましたが、その一つ一つの言葉に、こもっている思いが伝わってきました。

私は今後の決意としてまず、学校祭で今回の派遣について発表する際、この被爆体験伝承講話で私が感じたものと同じものを感じられるような話し方で伝えたいと思います。伝承者の方とは思いが違ってもかもしれませんが、一つ一つの言葉に私が感じたものを込める伝え方で報告をしたいと思います。原爆は自分が夢見ていた人生を一瞬で地獄の人生にしてしまう、恐ろしい兵器です。日本はこの原爆を受けた世界で唯一の国です。そのことはとても残念なことですが、そのことを力に変えて行動できることはたくさんあると思います。広島では言葉では説明しきれない、たくさんのかんを感じてくることができました。私ができることとしてまず、知っている人に広島に行くことを勧め、原爆の恐ろしさについて知ってもらうことから始めようと思います。

「笑顔あふれる世界へ」

石橋中学校 2年 黒澤 芽生

私が想像していた、原爆が投下されたヒロシマの「あの日」は、実際に広島県を訪れて大きく変わりました。私は、戦争や原爆について、学校での国語の授業や本で知識として知るような程度で「戦争」・「原爆」のそれぞれを、どれだけ考えても「実際に辛い目にあった人達の痛みや苦しみは分からないだろう」と思ってしていました。そんな中、この派遣事業に参加させていただき、実際に広島県を訪れてたくさんのことを知り、学ぶことができました。

まず1日目には、被爆者伝承講話会と平和記念資料館の見学を行いました。被爆者伝承講話会では、ご両親が被爆された水野さんによる講話をお聞きしました。お聞きした内容は、聞いているだけで辛くなるような原爆が投下された直後のヒロシマの様子や被爆された水野さんのご両親の体験でした。次に訪れた平和記念資料館では、被爆したヒロシマの写真や全身に大やけどを負い、苦しむ人々の絵、黒こげになったお弁当箱、ボロボロになった衣服など、他にもたくさんのものを見学しました。目をそむけたくなるような痛々しいものばかりで、「本当に、こんなことが起こったのか。」とってしまうほどでした。

2日目は、毎年8月6日に開かれている、平和記念式典に参列しました。厳粛な雰囲気の中、式が進行されていきました。「原子爆弾の投下を二度とくり返してはいけない」「苦しむ人々を増やしてはならない」という思いの重要性を改めて実感しました。また、夜には灯ろう流しを体験し、「世界平和」を願って灯ろうを流しました。きれいな色で輝く灯ろうは、星のようで本当に美しい景色でした。でも79年前の8月6日、この地でたくさんの尊い命が失われていったことを考えていると、灯ろうの光が少し悲しいようにも感じました。

3日目は、当時被爆者の救護活動のひとつの拠点となった、袋町小学校平和資料館を見学しました。壁に書かれた伝言は、被爆した直後の様子を物語っていて、誰かを探す伝言や生存確認をするような伝言が壁一面にびっしりと書かれていました。この当時は、誰もが自分の大切な人や自分自身の命を守ってどうにか生きようと必死だったのだろう、と思いました。

私がこの派遣事業で学んだことを通して、実際に広島を訪れて、「原子爆弾や戦争の恐ろしさ」・「命の尊さ」を学ぶことができました。そして、79年という年月が経っても、今も原爆で苦しんでいる方もいるのです。だから、もう二度と同じことをくり返してはいけないと思います。そのために、私達ができることは、原子爆弾の恐ろしさを知り周囲の人達に広めていくことだと考えます。だから、私もこれからは、広島県で学んだことを自分の身の回りの人に伝え、広めていきたいと思います。また、この派遣事業に参加してたくさんのことを学ぶことができたことや普段関わることのない他校のみんなと交流し合えたことは、とても良い経験になりました。お世話になった全ての皆様、本当にありがとうございました。

「世界平和実現のために」

石橋中学校 2年 森田 豪月

私はこの派遣事業に参加する前、「あの日」のことや平和の尊さについてある程度は知っている気になっていたのかもしれませんが、私がこの3日間で学んだことは、想像以上に悲惨で、知らないことばかりでした。

原爆ドームを見学すると、そこには活気ある街とは真逆の、異様な空気が漂っていました。テレビなどの映像越しに見るものよりも迫力があり、79年前の「あの日」に起きた現実を突きつけられたような気がしました。

被爆体験伝承講話会では、学校などで知ったものよりも詳しい話を聞きました。その話はとにかく悲惨で聞き続けるのが怖いと感じました。被爆した人たちの思いとは、怒りや憎しみではなく、「他の誰にも同じ体験をしてほしくない」という願いであることに、心を打たれました。

広島平和記念資料館では、「あの日」の惨状を写真や資料などの展示物を通して知ることができました。その中で最も印象に残っているものは、被爆した人達が描いた「あの日」の絵です。その絵から、被爆した人たちには「あの日」がどう見えていたのかが分かり、「あの日」の写真を見るよりもつらい気持ちになりました。また、被爆した人達の、悲しい、怖い、というような感情が伝わってきました。

平和記念式典では、外国の方の多さに驚きました。他国の平和式典に参加し、平和の尊さを知ろうとすることは、誰もがすることではないと思うからです。全世界で世界平和を実現させようとしていることを、身をもって知ることができ、感動しました。こどもの平和への誓いで印象に残ったのは「願うだけでは、平和はおとずれません。」という言葉です。平和のために自分が何か行動しているかを考えさせられたのと同時に、平和のために自分が何か行動をする必要があると実感できました。

この3日間で、今の私達の平和な生活が、どれほど尊いものなのかを知ることができました。このことは、今後どれだけ生きていっても、この派遣事業に参加していなければ知ることはできなかったと思います。世界平和実現のためにできる第一歩は、一人一人が平和への意識をもつことだと思います。そのために私は、派遣事業で学んだこと、考えたこと、感じたことを多くの人に伝えていきます。



原爆ドーム前にて

「すべての平和を願って今わたしたちにできること」

国分寺中学校 2年 大山 紗良

昭和20年8月6日。その日、原爆が落とされ、一瞬で約14万人もの命が失われてしまいました。沢山の人が亡くなり、79年経った今でも生き残った方々は後遺症で苦しみ続けています。私は原爆投下について、どのような意見や考えがあるのかを知りたく、今回の広島派遣に臨みました。

私が一番印象に残ったのは被爆体験伝承講話会です。被爆二世の水野さんが、原爆の恐ろしさなどを語ってくださいました。水野さんは原子爆弾のことを、「無差別に人を殺す、そういう武器」と話していました。原子力は本来、莫大なエネルギーを得る目的の技術でした。しかし、その強大なエネルギーは不幸なことに、人を大量に殺すための兵器として実用化されてしまいました。このことはとても悲しいことだとその時痛感しました。

また、「体の傷は治せても心の傷は治せない」という言葉は、原爆による終わりのない痛みを表しているようで、私も胸が苦しくなりました。そのとき、「いじめ」と似ているなとも感じることができました。国と国とでぶつかり合って、認め合うこともなく武力で解決する。なんて悲惨な世界なのだろうと思いました。このような世界を変えるためには何が必要なのでしょう。それは、私の役目でもある通り、一人でも多くの人に実情を伝え、知ってもらうこと。そして「今私たちにできること」を小さな一歩でも良いから行動することだと私は考えます。例えば、数年先のことはありますが、選挙に行くなどのちょっとした取組で世界が良くも悪くもなると思います。この先平和に過ごしたいという願いを多くの人と共有するために、私たちもできることをやっていきたいです。

広島を見学して、私は「復興の力」を目の当たりにしました。現在の広島は、緑が生い茂り、路面電車が多く走り、マンションやホテルが建ち並び発展した街でした。それと同時に原爆ドームや平和記念資料館などが残り、当時の様子を知らうとする沢山の人が行き交う街でもありました。沢山の人が復興に尽力した広島がもつ歴史や記憶を、これからも守り続けたいといけません。

しかし、被爆体験を伝える伝承者は、被爆を体験した人、またその家族らを合わせても260名しかいません。今では、ボランティア活動状態になっています。被爆者の高齢化が進む中でこれから先、誰がこの日にあった出来事や戦争の悲惨さを伝承するのでしょうか。私は、今を生きている私たちが進んで取り組むべきだと考えます。

今でも、世界では戦争が続いています。もう、誰も苦しめないよう私は私なりにできることを探して行動していこうと思います。核兵器の恐ろしさや平和の尊さ、生命の尊厳について伝えて、つなげていきませんか。

—すべての平和を願って。

「平和への約束 広島への記憶」

国分寺中学校 2年 秋山 颯玄

この夏、私は中学生平和研修派遣事業に参加して、原爆の悲劇と平和の大切さについて深く考える機会を得ました。広島で直接学んだことは、教科書や映像では感じることはできない重みがあり、それは私の心に深く刻まれました。

最初に訪れたのは原爆ドームでした。原爆ドームは1945年8月6日の原爆投下により壊滅的な被害を受けた建物ですが、その姿を見た瞬間、私は時間と場所を超えて当時の広島の惨状が目に浮かびました。崩れ落ちたレンガや鉄骨は、どれほど多くの命がここで失われたかを物語っており、言葉を失うほどの衝撃を受けました。

平和記念資料館では、多くの資料や写真、証言を通じて原爆の被害とその後の影響について学びました。焼け焦げた衣服や瓦礫の破片、犠牲者の遺品など、実際の遺物を目の当たりにすることで、戦争の現実が身近に感じられました。

翌日は、平和記念式典に参加しました。式典では、多くの人々が集まり、原爆の犠牲者を追悼し、平和を祈る姿が見られました。黙祷の時には、全員が静まり返り、その場の空気が一瞬にして張りつめました。目を閉じて犠牲者の冥福を祈りながら、二度とこのような悲劇を繰り返さないために自分ができることは何かを考えました。また、今回一緒に参加した他校の中学生とも交流を持ち、彼らの平和への思いを聞くことができました。そのことで共に平和を願う心が強まりました。

最後に訪れたのは、袋町小学校平和資料館でした。特に印象に残ったのは、「壁に残された伝言」です。壊れた校舎の壁に書き残された伝言は、原爆の混乱の中で家族や友人を探し、無事を知らせるために書かれたものでした。「〇〇はここにいる」「〇〇は無事です」といった簡単なメッセージでしたが、その意味は非常に重く、心に響きました。彼らがどれだけ必死に家族や友人を探し、絶望の中でも希望を持っていたかを感じると、私は悲しみが込み上げてきました。この伝言は、ただの文字ではなく、人々の切実な思いや願いの結晶であり、戦争の悲惨さを物語るものでした。

今回の学習を通じて、私自身も平和についてもっと深く考え、行動に移すことの重要性を認識しました。そして、広島で得た知識や経験を学校や家庭、地域に持ち帰り、多くの人々と共有することが大切だと思いました。平和は一人ひとりの心の中から始まります。だからこそ、私たちが平和の意味を理解し、それを次の世代に伝えることが必要です。

中学生平和研修派遣事業に参加できたことに感謝し、これからも平和の大切さを胸に、日々の生活や学びの中で実践していきたいと思えます。

